

荒川とともに歩み、 さいたまの今の発展を築いた偉人たち

荒川にまつわる偉人たちの足跡

荒川の流れはむかしより、周辺地域に住む人々に豊かな恵みを与えてきました。それらの恩恵を、経済や文化にしっかりと活かすべく取り組んできた人たちがいます。その働きが、さいた

まの今の発展にとっていかに重要なものであったのか。ここでは荒川の治水、農業、物流、芸術に貢献した5人について、その仕事ぶりをご紹介します。

治水

伊奈備前守忠次(1550~1610) 伊奈半十郎忠治(1592~1653)

荒川の歴史に残る大改修工事を手がけた父子

伊奈備前守忠次は、徳川家康の関東入国後、小室(今の伊奈町)などに移住し、荒川流域の新田開発のための堰や水路を作った人物です。さらに、水害への備えとして、周囲を荒川や入間川などに囲まれた現在の川島町一帯に堤防を築くなど、江戸を安心して暮らせる街にするべく大きく貢献しました。



伊奈忠次の墓
(勝願寺・鴻巣市)

そんな父の仕事ぶりを幼い頃から身近で見ていた息子・忠治は、若くして河川工法を習得。父の意志を継ぎ、荒川の大改修とよばれる河川工事をやり遂げます。この工事は、台地を切り割って新しい水路を作り、荒川の流れを変えてしまうという大規模なもの。これにより、荒川は利根川と別れ、入間川筋から隅田川を経て江戸湾へと流れ込むようになりました。

荒川の大改修以降、洪水に悩まされていた熊谷付近一帯では、荒川の流れがそれによって水害の心配からも解放され、新田開発が急速に進んだといえます。

川の豆知識 荒川のつけかえがもたらした影響

埼玉県東部の新田開発や荒川を利用した舟運がすすむようになり、江戸の町を発展させました。しかし、荒川の水を受け入れることになった和田吉野川や市野川の周辺では水害が増え、村をグルリと囲んだ「大囲堤」や洪水から避難するための「水塚」がつけられました。



浸水しないように盛土に建てた水塚

農業

松平信綱(1596~1662)

荒川流域の水田開発に力を注いだお殿さま

松平信綱は、伊奈氏によって作られた川島圍堤をより強固にし、水田地帯の整備と発展に力を注いだ人物です。さらに、川越城主として、原野の野火止の地に玉川用水から水を引く工事に取り組み、わずか200石だった土地を2000石のお米が収穫できる豊かな水田地帯へと生まれ変わらせました。



いまもその姿を残す川越城本丸御殿の玄関・大広間

物流

平賀源内(1728~1779)

荒川上流からの“舟の道”をひらいた江戸の天才

江戸時代の科学者、発明家、小説家など、多彩な顔もつ才人・平賀源内。彼と荒川との関わりは、鉱山開発をめざすビジネスマンという顔にありました。源内は、鉱山で採掘した石炭などの資源を荒川から舟で江戸へ運ぼうと考えついたのです。後に、この舟運は木炭の運搬に利用されるなど、荒川の経済発展に大きく貢献することになります。



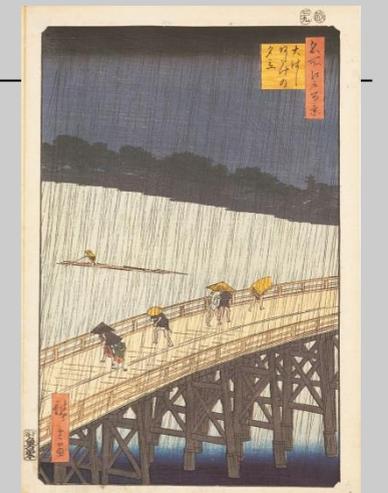
平賀源内(栗原信充『肖像画』国立国会図書館蔵)

芸術

歌川広重・初代(1797~1858)

荒川・隅田川の風景を愛した江戸時代を代表する浮世絵師

風景画で有名な広重は、川辺を好んで描いたことで知られます。右の作品「大はしあたけの夕立」では、隅田川に架けられていた新大橋を描いています。また、「隅田川堤の花見」という作品では、対岸の家並みや渡し船といった風景を細やかに描写。隅田川の美しい姿を今に伝える傑作を残しています。



歌川広重作「大はしあたけの夕立」
画像提供: 埼玉県立川の博物館